紙上法話

架空の仏と現実の仏

花も実もある人生を

寄席ノ楽屋噺

数年前ある会館で、本会主催の研修会がもたれ参加しました。畳の部屋を高座に設え、めくり（名前）を立て、テープの出囃しと共に講師先生のお出まし。聴講生は本会会長先生以下、皆さんが霊断の時に見ておられる、行道服・赤や金色の行道袈裟姿で、四十名ほどの霊断師の面々。話術の講習ですから、皆真剣な眼差しで構えていたのですが、四十五分×三回で都合百三十五回以上ドット笑わせられてしまいました。

三遊亭円歌師匠（落語協会会長・日蓮宗僧侶）の題材は【中沢家の人々】、師匠の結婚と共に師匠と奥さんの両親も同居、その妻が亡くなり再婚したらまたその両親と、合計六人のお年寄りと生活を共にする滑稽噺。新橋のお屋敷は国道一号線沿いにあり、横断歩道をヨタヨタと歩いていて、ドライバーに「何もたもたしてやがる、車に轢かれるぞ」とどやされますが、明治のお年寄りは負けていません。つかつかと車によって行き、「近ごろの若い者はだらしがないねえ、あたしらの時は人が車を引いたものだ」…

「笑いを誘う術は？」と問うと、「それは間ですよ」と教えて戴きました。しかし、その後の裏話が印象に残っているのです。

この演目、全国各地で演るとお客さんからプレゼントが山のように届きます。自分にではなく「六人のお年寄りに上げて下さい」チョコレート等の食べ物なんかは弟子達にあげればいいんですが、敬老の日には六枚の大きな座布団が届き、これの処分には大層困ったとのこと。「うちにはこんな年寄は一人も居やしない、創作落語なんだから……」結局このときは老人ホームへ寄贈したそうですが。

法然上人が大衆にお縋りしなさいと教えた阿弥陀如来は、バーチャルリアリティー（仮想現実）架空の仏なのです。

法然・親鸞上人以降、我が国の人々の尊い生命、膨大な金品が投げ捨てられてしまいました。その布施された品々は一体何処へ漂っているのでしょうか。誰が責任をもって処分しているのでしょうか。架空である阿弥陀様は預かり知らないことなのです。それは今も進行形ですが・・。円歌師匠の落語を本気にして送られたチョコレートどころの話ではありません。日蓮大聖人は日本国の人々にそのような愚をさせたくないという、大慈悲心で諫言されたことでした。

念仏ハ無間ノワザ

日蓮大聖人は清澄山で立教開宗を宣言の後、首都鎌倉の街区で【念仏無間／禅天魔／真言亡国／律国賊】のキャッチフレーズを掲げてお題目の宣布に打って出られました。幕府に進言された【立正安国論】でも、法然上人の念仏信仰を無間の業と痛烈に非難されています。

無間とは奈落ともいい、落ちて落ちて・・ストンと落ち処の無い、果てしもなく落ちていくことを言います。恐怖です。

実仏ハココニ

日蓮仏教に無駄はありません。私たちのこの生命が法身如来であり、その口に南無妙法蓮華経の言の葉をお唱えすることは、ご本仏様の業（わざ）であり（報身如来）、その唱えの母に暖められてやがて、心に一定と開覚し、親神様の御心を知って仏の仕事に勤しむ人（応身如来）と仕上がっていくシステム（三大秘密の法）になっています。

未熟な私が、四人の子供の父となり「お父さん」と呼ばれるのはくすぐったいのですが、時がそうさせています。やがて、その子供達も養育される側から、する側に移行していきます。そんなに遠い話ではありません。生命に仕組まれたシステムといえましょう。

念仏は社会浄化の仏業（仏の仕事）を放棄して、いつまでも養育される側にのみ終始している、幼稚な宗教なのです。

人々をして大人に仕上げようと、忍難慈勝のご一生を送られた大聖人。鎌倉時代の救われがたい世情から、幼稚なままに大衆を奈落の底に引きずり込んだ彼の祖師方。

笑門来福

今、私達聖徒は、受け難き人身を受け、あい難き妙法にあい奉り、三大秘法受持の人として新年を迎えました。どうか、空しくない、花も実もある人生を歩いて参りましょう。

円歌師匠がいかに日蓮大聖人の門下とはいえ、高座でここまでお喋りになることは、口惜りましょう。私たちに話のネタを下さったのかと、戴いてまいりました。

このお正月、お祖師様へのご挨拶の後は、師匠のライブでお笑い下さい。

三浦　恵伸

首導月訓

◆人間の幸福を具体的にいえば、第一に健康で長生きすること、第二に生活が安定して物質の苦労をしないこと、第三に物事を理解して無理を通そうとしないこと、第四に豊かな利他心を以て人を愛すること、第五は自分の仕事に生き甲斐を感じて魂を打込むことである。この五つを成就した人は真に幸福である。

◆生命あっての物種であるから、誰でも健康と長生きには努めている。だが不注意の為に無理をして後悔することが多い。貧乏の好きな人はこの世にいない。けれども世の中の役に立たなければ、経済的にむくわれないことを知らない者は随分多数居る。何とかゴマ化して世渡りしようとする馬鹿がそれである。

◆正直で損をする者はあるが、真実で損をした者はいない。正直は結構だが裏付けに物事に対する理解が要る。俗にいう馬鹿正真は無理の一つである。お互に損をしながら長い付き合は出来ない。利他心とは助け合いのことである。人を愛することは人を憎むことよりも楽で娯しいということを知る人は、大変得をする人である。

◆自分の仕事に生き甲斐を感ずることは、自分が得をして人にも得をさせることを考えれば出来る。商人は利益と同時に世人の重宝と安心を考えればよい。生産業者も同じ心掛けならば充分満足出来る。勤め人は雇主の片腕になる心掛けがあれば、その境遇において重用もされ愉しくもある。要するに利他心の実践である。

◆家庭の主婦は夫と子供を教育しなければならない。愛情の教育であり、利他の教育である。愛の前には誰でも頭を下げる。だがその使い方は非常に難しい。一番簡単で効果のあるのは、自分は夫を愛するために、また子供を愛するためにこの世に生れて来たと信ずることである。愛の一本槍に生き甲斐を感ずる事である。

幸運の秘法　九識霊断法　人生の指針